

戦前の日本語教育における言語観の問題

—— 国語対策協議会議事録を中心に ——

権 在 淑

(お茶の水女子大学 大学院 研究生)

本研究発表は、戦前の植民地に対する日本語教育の問題を、日本語教育に関わった人々の言語観・日本語観に焦点を当てて分析、考察することを狙いとするものである。日中戦争のさなか(1939年)、アジアに対する日本語普及を目的に文部省の主催により開催された第1回国語対策協議会と、その議事録を研究の中心的な資料とした。

同協議会は、本国と植民地各地の関係諸機関を総動員し、政・軍・官・学・教の各界を網羅、植民地に対する日本語教育の戦前のひとつの到達点であった。日本国内における〈国語〉という概念の成立は、1900年を前後する日本資本主義の帝国主義への移行期、対外的日本語教育の本格化の時期に対応した出来事であったが、この時期に始まる対外的日本語教育の幾多の諸問題を国家的な規模で解決するための対策を練るのが本協議会であった。

さて、「陛下ノ赤子トシテ恥シクナイ人間ヲ作り上ゲル」という発言に窮められている日本語教育の目的は次の3つに集約できる。①「東亜新秩序建設」に協力させるという政治的目的、②「国民精神の養成」という他民族同化のための社会的道徳的目的、③「天皇の赤子」をつくるという思想的目的である。そしてこれらの目的のもと、日本語を「国語」として強要し、「ドウシテモ日本語が分ラナケレバ生活上困ルト云フ所マデ」植民地の人々を追い込む方法、即ちく日本語の常用化=他民族母語抹殺>が提起されるのである。

また、国語調査統一機関や日本語教育連絡機関の設置等が決議された。これにより日本語教科用図書調査会の設立、雑誌『日本語』の創刊(1941年)、辞典の編纂等、とれまでの日本語教育に一層の拍車がかけてゆく。一方、朝鮮においては朝鮮語抹殺がエスカレート、朝鮮語研究者たちが投獄され肉体的精神的拷問を受けるといった1942年の朝鮮語学会事件にまで発展する。ちなみに、協議会の発言者は揃ってく日本語の普及>を肯定しており、この命題自体を疑う者は一人もいなかったことも注目される。

参加者達の日本語観の根幹は次の3点にまとめることができる。□日本語の概念が国語、更に標準語の概念と同価であるとみる、図く国語は国民の精神的血液>とみる、③言語(日本語)を皇国臣民となるための手段とみる。

まず□のく日本語=国語>では日本国内の少数民族語の存在が排除され、く国語=標準語>では諸方言の存在が無視される。また図においては、言語(日本語)で国民を一元的に統合する思想をみることができる。③の言語観にあっては、言語が天皇制の一角に民衆のひとりひとりを組み込むための手段であることがわかる。

日本国内のアイヌ語等の少数民族語の弾圧、東北地方等における方言弾圧、先述の植民地朝鮮における民族母語抹殺等々を支えた協議会におけるかかる日本語観こと、言語観の最も疎外された形態のひとつなのである。